

令和7年度 幼児教育研修（年齢別担任研修 2歳児・第1回）

「子どもの発達と保育者の関わりについて」

～2歳児の自我の育ちを受けとめる保育～

日時：令和7年5月30日（金）15:00～17:00

会場：足立区役所 庁舎ホール

講師：子どもとことば研究会事務局 小野崎 佳代 氏



2歳児って？

自立と依存の間を揺れ動く2歳児

おおむね2歳

基本的な運動機能や、指先の機能が発達する。
身の回りのことを自分でしようとする。
排泄の自立のための身体的機能も整ってくる。
意思や要求を言葉で表出できるようになる。
強く自己主張する姿が見られる。
大人と一緒に簡単なごっこ遊びを楽しむようになる。

2歳前半の発達過程（おおむね2歳0か月～2歳6か月）



転びながらも
よく走る



コレナアニ？

二語文から多語文
第一質問期

おおむね3歳

基本的な運動機能が伸び、それに伴い食事、排泄、衣類の着脱などがほぼ自立できるようになる。
話し言葉の基礎ができて、知的興味や関心が高まる。
自我がよりはっきりしてくるとともに、友達との関わりが多くなるが平行遊びである。
日常経験したことをごっこ遊びに取り入れる。
予想や意図、期待を持って行動できるようになる。

2歳後半の発達過程（おおむね2歳7か月～3歳0か月）



みてて！

「みてて」には二つの意味がある
手を出さないで→自立、自己主張
どこにも行かないで→甘え、依存



閉じた〇を描
き意味づける
(ママなど)



貸して

少しなら待てる

発達とは

発達とは環境との相互作用によって
資質・能力が育まれていく過程。



発達段階ではなく発達過程
と捉える。
到達していないから問題、と
捉えるのではない。

- ある時点で何かが「できる、できない」といったことで発達を見ようとする画一的な捉え方ではなく、それぞれの子どもの育ちゆく過程の全体を大切にする。
- 子どもの育つ道筋やその特徴を踏まえ、発達の個人差に留意し、一人一人の心身の状態や家庭生活の状況などを踏まえて、個別に丁寧に対応することが重要である。
- 子どもの「今」の姿を過程の中で捉え受け止める。

「保育所保育指針解説（平成30年3月）第1章（1）保育所の役割イ」より

- 子どもが辿る発達の道筋や順序性は共通。
- けれど、一人一人の子どもの成長の足取りは様々。
- 子どもの発達は直線的ではなく、行きつ戻りつする。
- 機能の発達的連関を重視する。（発達全体を視野に）



一人一人の異なる歩みに寄り添い、
その子らしい育ちを支える

自立と甘えの間を揺れ動く2歳児

ママ
やって



じぶん
でやる



「わがまま」や「強情」に見える行動に含
まれる行為への要求と自我の要求（自分
を尊重してほしい）を見極める。

「なんでも自分でやりたい」「できる」という有能感
から自立に一步踏み出しが、実際にできることとの
ギャップに、「できない」と依存へと逆戻りし揺れ動く。

好きなズボンを履きたかったA君。ダメと言われると意地でも
脱ごうとしません。「そのズボン履いててもいいよ。ご飯食べたら
履き替えようか」と声を掛けると、あっさり脱いで履き替えました。

この時期の自己主張の発達上の意味

自己主張を受け止めてもらい、認めてもらうことで育まれる「人への信頼感」と「自己肯定感」の土台

受け止めてもらえない、自己肯定感が育めない



ぶつかり合い、葛藤しつつも、少しづつ相手を受け入れる力

他者とのコミュニケーション能力

ぶつかり合いの場面での保育者の役割

「つもり」を読み取る
=子どもの言葉(思い)を聞く 保育者の思いを伝える

~したかったんだね
わかったよ



でもね…

受容・共感

子どもが自己復元できる「間」を大切に

「つもり」と「つもり」をつなぐ仲立ちをする



相手にも思いがあることに気付いていく

気持ちをコントロールする力や、思いを言葉で表現することにつながる。

信頼できる大人に支えられて、人との葛藤を切り抜けることを知り始める。

一人一人の思いや願いを受け止め、主体性を育む保育者の役割



全身を使って心と体を開放できる遊びを保障する。簡単にできるものは面白くないので、少し挑戦する遊びなど、心身の発達状況にあった遊びを豊かにすることで、達成感や満足感を感じ、自信や意欲につなげる。

食事は不適切な保育が起こりやすい。
ムキになると、子どもを追い詰めてしまう。
「いつか食べられるよ」の気持ちで「楽しく食べる」を大切にしていく。



「人っていいな」「友達と一緒に楽しい」という経験を積み重ねていく。良質な絵本、紙芝居、ふれあい遊びなどのスキシップや情操的な遊びを取り入れていく。



トイレでの排泄は、歩行が安定していること、排泄間隔が2時間以上空くことが目安。
遊んでいるのを中断したり、大人の都合で連れて行ったりせず、一人一人の排泄間隔をつかみ、タイミングを見計らって声を掛ける。

養護を通して基本的信頼感を育む

何よりも、子どもの「やりたい」気持ちを大切に、「できた!」と一緒に喜ぶ姿勢で。

子どもが自ら育つ力を信じ、葛藤に寄り添い、自我の育ちを丁寧に支える。

子どもが安心して自分を出せるように、保育者は安心・安全の基地に!

保護者との連携

基本的生活習慣の獲得は、家庭との連携が不可欠である。

保護者の生活や価値観が多様化している中、子どもの姿と園ではどのように取り組んでいるかを丁寧に伝えしていく。



「～してください」と一方的に要求するのではなく、子どもにとって生活習慣を獲得していくことの意味や、子どもの成長の姿とその喜びを共有する姿勢で、保護者との信頼関係を築いていく。

→指示ではなく支持する姿勢を大切にしていく。

受講生の報告書より

子どもたちの思いを受け入れて、葛藤を少なくしていくほうが子どもたちにとって良いと思っていたが、葛藤は決して悪いことではないと学んだ。子どもたちの思いに寄り添いすぎても自我の育ちには繋がらないので、自分で考える時間を作ったり、前向きの葛藤につながる手助けをしたりしていきたい。



発達過程や家庭環境などがそれぞれ違う中で子どもたちが楽しんでいることを保育者が一緒に楽しんだり、気持ちに寄り添い自分の思いをわかってもらったという経験を重ねたりできるよう子どもたちとの『対話』を大切にしていく。また、自立や葛藤の狭間にいるときは特に時間にも心にもゆとりをもつよう心掛ける。子どもたちそれぞれの発達を踏まえ、子どもたちが『心ゆくまで遊べる環境と空間、時間』を保証できるように職員で連携をとっていきたい。